

福島大学附属図書館報	No.41 2008.10.1発行
書 燈	〒960-1293 福島市金谷川1番地 TEL (024) 548-8083 http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/ 携帯電話版 http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm
	福島大学附属図書館



古書の寄贈

人間発達文化学類 高野 保夫

去る6月、伊達市(旧伊達町)在住の芳賀敬夫氏が所蔵する600点余の古書が大学の附属図書館に寄贈されるという嬉しい出来事があった。縁あって、その仲介をすることになった関係もあり、寄贈された書物や芳賀家のことなどについて少し触れることにしたい。

今回、大学に寄贈された古書類は、幕末から明治期にかけて出版されたもので、伊達・長岡の旧家である芳賀家の土蔵に大事に保管されていたものである。現在、同家に残っている購入書籍リストには、2000点前後の古書類が記録されている。購入に充てた費用は当時としては相当な額と推測されるが、現存するものはその3割ほどである。

いま、寄贈された古書類を大まかに眺めると、いくつかの特徴が見えてくる。まず1つは、『史記評林』、『四書正解』、『唐詩選』、『十八史略訳解』等の漢籍に関するものが圧倒的に多い。その数は約200点。2つ目は、文学的教養に資する書物が目立っている。『大鏡』、『増鏡』、『源平盛衰記』、『続群書類従』、『文章規範評林』などを含め、およそ150点前後である。

これらの漢籍等が数多く残されているのは、明治期に芳賀氏の曾祖父・伊之作(4代目芳賀甚七)や祖父・守之助(5代目)が学塾や文庫を開設し、地域の政治、教育、産業、宗教等の啓蒙活動に熱心であったことと深く関わっている。曾祖父と祖父の二代が収集した多くの書籍の一部は、学塾等のテキストではなかったかと推測される。

今回の古書の3点目の特徴は、寄贈された本の中に『農業全書』、『農政本論』、『泰西農学』、『草木六

部耕種法』、『蚕業集談会筆記』、『大日本簡易排水法』等の書物が50点ほど見られることである。もともと伊達地方は養蚕業が盛んな地域であったが、芳賀家も蚕種製造業を生業とする伊達地方有数の資産家であった。その最盛期には600坪の屋敷に米倉、味噌蔵、文庫倉、桑倉がひしめいていたといわれる。

ところで、芳賀家の古書には、『和訳萬国公法』、『日本新史略』、『訓家日本外史』、『仏民法』、『東洋民権百家伝』、『西洋事情』などの書物が数多く見られる。その数は優に100点を超しているが、これも特筆すべきことである。時代を先取りした書籍が目立つのは、曾祖父が初期の福島県議会議員をつとめていたこと、また、伊達地方の自由民権運動の草分けで、河野広中等を何度も自宅蚕室に招き政談講演会を開催したことなどと深い関係があるであろう。その辺の事情は『福島民権家列伝』(高橋哲夫)に詳しい。

また、芳賀氏の祖父守之助は父の薫陶を受け、政治的活動に関心を持つとともに、キリスト教の布教活動にも取り組み、すでに明治20年代の前半には日本基督教団福島伊達教会の創設に尽力している。しかし、今回寄贈された書物の中に教会関係のものは見あたらない。詳細は分からないが、おそらく何らかの事情で別の教会関係者の手元に残されているのではないと思われる。

今回、芳賀氏のご好意によって数多くの古書の収蔵が実現できたわけであるが、改めて感謝申し上げたい。これを機に近代の黎明期における自由民権運動の意義・役割、産業振興と養蚕業との関係、明治期の地方における文学事情の問題等に新しい光が当てられることを期待したいと思う。

「君はマイクロフィルム・リーダーを見たか？」—海外の図書館事情— 行政政策学類 村上 雄一

福島大学の学類生や院生、そして教職員も含め、附属図書館にマイクロフィルム・リーダーが設置されているのを知っている者は、どの程度いるのであろうか。そして、それを利用したことがある者はどのくらいいるのであろうか。第一、機械があったとしても、マイクロフィルムそのものを附属図書館はどの程度揃えているのであろうか。

もう10年以上も前の話である。私が歴史学研究科の大学院生として過ごした豪州クィーンズランド大学のメイン図書館には、マイクロフィルム・リーダーが、7~8台、学生が自由に出入りできるフロアに設置されていた。また、機械のみならず、マイクロフィルム自体も学生が自分で開架から持ち出してくるという方式であった。同図書館が主に所蔵していたフィルムは、19世紀から現在まで発行されているものも含む、豪州の主要新聞だけではなく、地方紙もあり、大学院生のみならず、一般の学部生も、手軽に閲覧することが可能であった。

また、当時も、そして今も、メイン図書館の開架はちょっとした書庫のようなもので、100年以上も前の出版物が並んでいることも珍しくなく、そのような文献も自由に手にとって閲覧できる。無論、蔵書の中には貴重なものや、取り扱いに注意が必要なものもある。そのような文献は、図書館員が常駐する閲覧室で目を通すことができた。

このような図書館の運営方針は、州立図書館なども同様であり、週末にもなると多くの一般来館者がマイクロフィルム・リーダーの前に座っている姿を見ることができる。

福島大学附属図書館に限ったことではなく、日本国内の多くの国立大学附属図書館では、マイクロフィルム化された19世紀の新聞等を所蔵し、高等教育で活用しようという発想はあまりされてこなかったように思われる。そのため、古い文献になればなるほど、その活用を計ることよりも、それらを保存すること、言い換えれば、極力、来館者の手が直接届かないところに保管することに力が注がれてきたのではないかと感じている。

また、高価なマイクロフィルム・リーダーを来館者が自由に使用することは、その維持費も含め、莫大な経費がかかることもあり、日本では敬遠されてきたのであろう。その結果、そのような機械が図書館に設置されていたとしても、それが人目に触れるような場所に置かれることはまずない。

このように述べてくると、結局は「予算の問題か」と思われるかもしれない。しかし、ここで述べたいことはそういう単純なことではない。「情報」に対する価値観というものが、日本ではまだまだ育まれてきていないのではないかという点を述べたいのである。

ここでいう「情報」とは、物事を判断する際、教科書や参考書に書かれていることをただ鵜呑みにするのではなく、自分でも再検証するという作業を通して得られるものをイメージしていただきたい。そのような「情報」に対して価値をおく社会では、マイクロフィルム化やデジタル化も含め、いかに過去の文献を活用できる状態に保つかという視点から、図書館や文書館が整備されることになる。逆に、そのような価値観をもたない社会であれば、どんなに予算を増やして整備したところで、有効活用されることはないであろう。

さて、附属図書館のマイクロフィルム・リーダーの設置場所である。興味のある方は図書館職員の方に聞いてみよう。そして、機会を見つけてぜひ利用していただきたい。そこには、教科書や参考書からでは得られない「情報」があなたを待っているにちがいない。



メイン図書館脇のカフェ(福島大学にも欲しい!)

思い出の一冊 『チョウはなぜ飛ぶか』(日高敏隆著 岩波書店) 共生システム理工学類 小山 純正

中学生向き岩波科学の本の1巻であるこの本を手にしたのは、大学生のときでした。この本は、チョウのオスがどのようにメスを見分けるのかとか、チョウはなぜ(違う個体がだれに教わるわけでもなく)同じ道を通るのか・・・などという、日高氏が少年の時から持ち続けていた(おそらく昆虫好きの少年だったら一度は持ったであろう、そして虫に興味のない人にとってはどうでもいいような)疑問を、野外での実験、観察を繰り返しながらひとつひとつ解き明かしていく様子を描いた本です。アゲハチョウの翅や、それに似せた黄色と黒の縞々を描いた厚紙を畑に立てかけ、やって来るチョウの数を数えるといった、なにやら小学生の夏休みの自由研究を思い出させるような実験のお話です。普通の科学の本のような、素晴らしい研究成果をやさしく説明する、といったスタイルの本ではありません。この本で日高氏が書きたかったことは、仮説を立てたり、その仮説を確かめるために行う実験の楽しさ、いろいろな失敗を繰り返しながら、自分の予想通りの結果が出たときの喜びなどで、“中学生向き”という触れ込みどおり、平易な文章でわかりやすく書かれているので、それらは中学生にも、あまり虫には興味のない大人たちにも十分に伝わってくると思います。昆虫好きの少年たちは、日高氏と一緒に畑や野原でチョウを追いかけているような臨場感を味わうでしょう。

そのような楽しさ、面白さにもまして、私がこの本に惹きつけられたもう一つの理由は、動物の行動にも従来の実験科学の手法を用いたアプローチが可能であることを、この本が示してくれた点にあります。ローレンツ、ティンバーゲン、フリッシュらによって発展してきた動物行動学は、ヒトや動物の行動を解析することにより、生物学のみならず、生態学、心理学、社会学など、さまざまな領域に影響を与える新しい分野として注目を浴びつつありました。小学生時代の昆虫採集の延長で生物に興味をもち、生物系への進学を考えていたものの、教養学部で学ぶ細胞レベル、分子レベルの生物学に食傷気味だった私のような学生にとって、動物そのものを扱



う“動物行動学”は非常に魅力的な分野でした。ただ、あまりにもその間口が広いため、動物の行動を眺めていればそれが“動物行動学”だ、というような雰囲気もあり、なんとなく素人っぽさも残る分野で、科学としての品格に欠けるところがあるな、と感じていました。そんな時にこの本は、動物の行動を観察することによっても、きちんとした実験科学を展開し得るということを示してくれ、私が大学で動物行動学の分野に進むときの大きな道標になりました。

私の興味は、行動の発現機構を神経のレベルで明らかにしようという方向にあったため、日高氏の行動学とは異なる方向に進み、今は神経生理学者を名のっていますが、動物の行動を観察し、動物の行動から学ぶ、という姿勢は日高氏やローレンツらと共通のものと思っています。学生時代は、“動物の行動”を研究の対象に置くことは、かなり特異的なものという自負(思い込み)がありましたが、“動物の行動”を“植物”に置き換えてもいいし、“物質”にも、“社会”にも置き換えられる。対象を詳細に観察することは、研究を進めていくうえでの、ごく一般的な基本姿勢であるわけですが、私は、それを動物の行動から学んだことになります。

最近復刻された本書(写真)は、なぜか“中学生”ではなく“高校生に贈る…”となっているのは、ゆとり教育による学力低下を反映しているのか、それとも日高氏流のユーモアの現われなのかはわかりませんが、高校生のみでなく、小学生にも読んで欲しいという日高氏の思いは、随所から伝わってきます。チョウやトンボとあまり関係のない大学生諸君にも読んでほしい1冊です。

特別展示

「福大考古学の20年－行政政策学類考古学研究室所蔵資料の展示－」の開催

行政政策学類 菊地 芳朗

さる7月11日から8月5日の間、附属図書館の展示コーナーを借りて、上記展示会を開催しました。これは、本学の行政社会学部・行政政策学類が本年10月で創設20周年を迎えるのを記念する行事の一環として企画したものです。

行政政策学類では、その創設以来、考古学の教育と研究が行われており、福島県内外の遺跡に対する発掘調査をほぼ毎年実施するとともに、これまで多くの卒業生を関係各所に送り出してきました。それにもなまって所蔵する考古資料はかなりの量に達していますが、その存在は学内でもほとんど知られていないのが実情です。また、行政社会学部設置以前にも、福島大学では歴史教育の一環として考古資料の収集や発掘が行われており、それによる多くの遺物が入知れず学内に眠っています。

したがって、今回の展示は、福島大学の考古学活動とそれにもなう重要資料を学内外に紹介することをおもな目的とし、その企画と実施は、菊地の指導のもと行政政策学類菊地ゼミの院生・学生および考古学実習受講生が行いました。

菊地はかつて福島県立博物館に学芸員として勤務し、展示会を企画・実施した経験をお持ちですが、その他のメンバーは大学祭などをのぞけば全くの未経験者です。また、福島大学ではこれまで考古学関係の本格的な展示会を開催した実績がない(と思われる)ため、そのための設備や道具がほとんどない状態でした。企画にあたってまずは展示場所の選定からはじまりましたが、これについては学内で最も広いスペースを確保でき、少数ながらも展示ケースを備え、多くの学生・教職員や学外者が出入りする附属図書館が候補となったのはごく自然な成り行きでしたし、幸いにも図書館各位に快諾をいただき、企画がスタートしました。

準備の本格的なスタートは、本年4月のメンバー間での展示趣旨の確認からはじまりました。その後、展示具・展示会場の確認、展示資料のリストアップ、展示レイアウトの決定、展示ケースの借用など、ほぼ2週間に1回のペースで準備を進めていきまし

た。また、展示品の内容を詳しく理解してもらう写真パネル・解説文・キャプションも必要なため、これらの担当者も決め、その作成にも多くの検討と時間を費やしました。さらに、開催実績をのちまで形として残すため、わずか8ページではありますがパンフレットを作成し、観覧者に無料で配布することにしました。

準備を進めていく中で最も困ったのは、展示ケースの絶対数が足りないことでした。図書館開館時間全てに監視員をおくことはできませんし、盗難等のトラブルを避けるためにも鍵付きのケースに資料を収めることが不可欠です。そのため、旧知を頼って二本松市歴史資料館と福島県立博物館から展示ケースを借り、大学のトラックを使って運び込みました。したがって、展示をよくご覧になった方は、展示ケースの形や大きさがまちまちであったことに気づかれたかもしれません。

こうして半年近い準備ののち展示がはじまり、瞬く間に終了を迎えることになりました。決して満足すべき内容ばかりではありませんが、福大としては初の本格的な歴史資料の展示会になったのではないかと自負しているところです。また、メンバーは真摯に展示準備に取り組み、この企画をとおして大きく成長しました。今後は、今回の経験も生かしつつ「福島大学博物館」の設置に向けた努力とアピールを、微力ではありますが地道に続けていきたいと考えています。



一般利用者の立場から

法政大学(通信教育部) 菅野 幸晴

私は法政大学の通信教育を受けながら、この図書館を利用しているものである。福大図書館を初めて利用してから10年近くが経つが、この間いろいろな本にお世話になっている。私が福大図書館を利用しようと思ったきっかけは、なかなか近くに大きな図書館がなかったということであった。たしかに、自分の住んでいる町にも図書館はあったが、あまりにも小さい故に所蔵数も少なかった。さらに、その頃は車がなかったために、バスで1時間近くかけて県立図書館を利用していた。ある日、近くにあった福大図書館が目に入った。私は法政大学図書館を通して紹介状を書いてもらい、1年契約で福大図書館を利用することになったのであった。1年契約とはいえ、それは4月になるたび更新の手続きをしてきたのだが、いつしか利用証がカード形になり、それもコンピューターで管理されるようになり、やっかいな手続きをせずに済むようになった。

カウンターの内側から

教育学研究科2年 星 久美子

カウンターの業務につくようになって気づいたのは、今まで自分が図書館のほんの一部しか活用できていなかったということです。たとえば、図書館は約82万冊の本を所蔵しており、書庫には貴重な文献も多く、まるで宝の山です。たとえ探している本が見つからなくても、他の図書館から資料を借りる「相互貸借」や、コピーを送ってもらう「文献複写」という手があります。資料の提供だけでなく、共同学習室やロビーの展示コーナーなど、場所の提供も行われていてとても便利です。「展覧会を開きたいけど会場を借りるとお金がかかるし・・・」とお困りの方、ぜひ展示コーナーを見てください。自由にパネルを使えますし、何より多くの人に見てもらえること間違いなしです！

また、利用者として6年目にあって、図書館が徐々に変化していることにも気付きました。私が図書館を使い始めたころは、図書館の入り口には重々しいゲートがあって、学生証を持っていないと入れませ

さて、福大図書館は、自分が学んでいる日本文学関係の書物から自然科学等に至るまでその所蔵されている本が多く、そのスケールの大きさに思わず「さすが大学附属図書館というだけのことはあるなあ」と感心した。特に文学関係の書物の多さは町立や県立のそれ以上であった。これからは、レポートや今取りかかっている課題に福大図書館の書物を活用していくつもりである。現在の取得単位もついに100の大台に乗った。これもひとえに福大図書館の書物のおかげと大いに感謝している。そして今、私の学業も卒論作成という最終局面をむかえている。この卒論作成にあたっても、書物に感謝する意味をこめて、精一杯努力していきたい。卒論作成と卒業することが今の私の目標になっている。

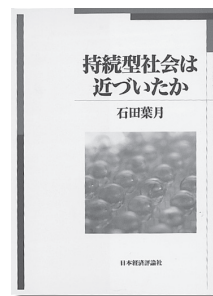
卒業後も福大図書館の利用を続けたいと思っている。

んでした。延滞をすれば延滞日数に見合った期間、貸出不可のペナルティを科せられましたが、今日ではそのような制限は最小になり、より活発な利用が出来るよう努力されています。また、以前は、学生は学年による入庫制限がありましたが、現在はカウンターで申し込みをすれば1年生でも入庫が可能です。それから、予約本などが届くと今ではあらかじめ登録していたメールアドレスにメールで通知してもらえます。図書館ロビーに学籍番号が掲示されていたのと比べると非常に気楽に依頼できるようになったと思います。

このように、図書館には利用できるものがたくさんありますし、かつてよりも使いやすく、開かれた環境になってきています。これは活用しないことにはもったいないと思います！ぜひ図書館に足を運んでみてください。きっと図書館の新しい魅力が見えてくるはずです。



●●● 学内教員著作寄贈図書 ●●●



『持続型社会は近づいたか』

日本経済評論社 2008.1

石田 葉月 著

請求記号：519/I72j

主流の経済学の枠組みによって持続型社会を設計するのは危険である。経済学に先駆的な貢献をした経済学者、及び経済学的思想に影響を及ぼした哲学者には、財と福祉との関わりに強い関心を持ち、行き過ぎた消費行動に対して否定的な態度を示していた者が少なくなかつ

た。一方、主流の経済学は、財の消費に関する規範論には深入りしない傾向が強いため、大量消費社会の福祉の意味合いに関する検討は表面的なものになっている。また、環境効率の向上が環境負荷削減効果を食いつぶす「リバウンド効果」と呼ばれる現象についての研究は遅れており、少なくとも現段階では、環境技術の進歩に過大な期待を持つべきではない。持続型社会の要件とは、二つの定常性、すなわち経済活動の規模における定常性と資源の分配構造における定常性が、バランスよく保たれていることであり、これらの観点から、経済学の枠組みは大きく見直されなければならない。



『「平成大合併」の政治学』

公人社 2008.4

今井 照 著

請求記号：318.1/I43h

行政政策学類の大学院である地域政策科学研究科が編集した本では、市町村合併をしなかった自治体を「自立型市町村」と呼んでいるが、政府は、市町村を自立させるために合併を推進するのだと、正反対の説明をしている。また、市町村合併のことを「究極の行政改革」という声もあるが、現実には、合併自治体ほど財政規律が破綻し、約2兆円もの新たな債務を積

み上げている。本書は、こうした混乱と錯覚に基づいて進められ、結果的に日本の自治・分権に対する大きなダメージとなった「平成の大合併」について、政治学的視点から検証するものである。今回の市町村合併が国政の政治家によって主導されたということは、各種の証言から明らかだが、その動因は依然として不明のままとなってきた。本研究では、国政に対する政治過程と政策過程、さらにそれを受容した市町村側の「事情」をていねいに整理・分析しつつ、「平成の大合併」は、分権改革による自治体の政治化をおそれた国政の政治家が、中央政党による自治体政治の統制を強めようとしたものではないかという結論を導いている。



『自己形成の心理学』

(福島大学叢書新シリーズ：4)

風間書房 2007.3

中間 玲子 著

請求記号：371.47/N35j

「私」はいかにして今の「私」になったのでしょうか。そこには、遺伝、文化、教育など様々な要素による影響を考えることができます。同時に人間には、主体的な自己形成の過程、すなわち、自覚的に行動したり自分自身を対象化したりといった自己意識の作用によって展開される過程をも想定することができます。では、それはいかな

る過程なのでしょう。常にスムーズに行くとは限りません。また、常に自己形成への意欲に駆り立てられているとは限りません。いかなる状況において、いかなる人によって、自己形成過程はスムーズに遂行されるのでしょうか。

この問題を読み解く鍵として、私は、個人が思い描く「こうありたい自分」である"理想自己"や、人生の中で出会ってしまう「いやな自分」である"否定的自己"の概念に着目しました。それらに対して人はどのように向きあっているのか、そしてその向き合い方は自己形成とどのように関わっているのか。これらの検討を通して、上記の問題を考えてみたのが、この本です。

●●● 学内教員著作寄贈図書 ●●●



『人物叢書：足利義持』

吉川弘文館 2008.6

伊藤 喜良 著

(人物叢書：新装版 253)

日本歴史学会編集

請求記号：281/N771j/A-253

足利義持は室町幕府の四代将軍であるが、一般の人々にはあまり知られていない人物である。父親の義満は南北兩朝を合体させたり、日明交易を樹立させたり、また近年は皇位を篡奪しようとしたのではないかと論じられたりしてかなり有名な人物である。また弟の義教は嘉吉の乱で家臣に殺害されてしまうというような不名誉な将軍であるが、それでも

それなりに知られている。このようなことから、一般的には義満や義教時代を典型的な室町時代とみなして彼らの行った政治・外交等が評価されている。しかし本書は義満と義教の間にあってよく知られていない義持を取り上げて、彼の人物を考え、彼の行った政治や外交等を考えてみようとしたものである。父親の義満の権威は公・武を超越して絶大であったが、義持は朝廷や有力守護等と基本的には協調しながら、室町時代においてはもっとも平穏な時代を築いたといえる。また義持は相当な文化人であるとともに、禅を中心に神仏に対する崇拝はたいへんのものであった。このような点を中心に義持の生涯を叙述したものである。



『天皇・天皇制をよむ』

東京大学出版会 2008.5

歴史科学協議会編集

執筆者 伊藤 喜良 ほか

請求記号：288/R25t

天皇家の問題がメディアによって様々に取り上げられている。皇位継承問題、皇太子一家の問題、皇太子と天皇・弟との関係、天皇の病気等々、毎日毎日マスコミを賑わしている。私人として天皇家一族をみた場合、興味本位に取り上げられて気の毒な感もなくもないが、別の面からいえば、戦前の絶対的・神秘的な天皇制から開放さ

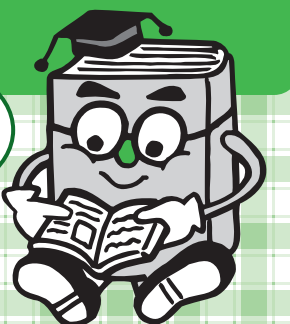
れて、象徴天皇制になったことを「象徴」しているような事態であるといえ、好ましいことであるかもしれない。しかし様々に話題となっている天皇や天皇制についてどれほど理解してマスコミ等を取り上げているのであろうか。時々理解に苦しむようなことを平然と述べている著名人も存在している。明治以後に成立した「宮廷儀礼」や慣例をあたかも太古以来のものと言っているような人物が、メディアで幅をきかせている状況である。そのような中、本書は天皇や天皇制を理解する上での基本的なポイントを押さえ、歴史事実を明らかにした格好の書物であるとともに、戦後の天皇制研究を分かり易く集大成したものである。

トピック！

- 開架新着図書コーナー本には、図書カバーを付けたまま、配置することにしました。

- 福島県内図書館横断検索に『福島学院大学』が加わりました。

新着図書情報として活用してね!!



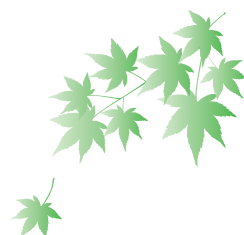
こんなものがあったのか！

地域政策科学研究科1年 吉田 秀夫

M・ガードナー著／市場泰男訳『奇妙な論理—
だまされやすさの研究—』社会思想社 1989年

アメリカの原理主義者は言う、「人間の遺伝子は知性体によって設計されたものだ」、「進化論は間違っている」。また彼らは言う、「進化論は仮説に過ぎない」と。奇妙なことに彼らはそれを科学的に「証明」したと考えている。これは21世紀の話だ。奇妙なのはアメリカ人だけではない。日本人だって他人事ではない。オウム事件を忘れてはいけない。なぜそれら荒唐無稽な「擬似科学」を主張する人間がいるのか。今回紹介するのは彼ら「擬似」科学者について研究した M・ガードナー著、市場泰男訳『奇妙な論理—だまされやすさの研究—』である。本書は1952年に刊行された M・ガードナー著『科学の名において』（原題『In the Name of Science』）から訳者が数章をピックアップしたものである。彼は、第二次大戦後のアメリカに「偏執狂的妄想」を動機とする「擬似

科学」的論説が続々と現れたことを嘆き、それらを名指して批判するために『科学の名において』を著した。本書では多くの「擬似科学」的学説が紹介されている。地球の内部が空洞であると主張する「学説」、地質学を聖書の記述にあうように再解釈する「学説」、あの手この手で相対性理論を否定しようとする「学説」。とりあげられる分野は多岐にわたる。今これを読んでいる文系学生のあなたも「擬似科学」は他人事ではない。社会科学にも「擬似科学」は潜んでいる。貴方が引用しようとしている web ページが「擬似科学」でないと貴方は断言できるだろうか。「擬似科学」をレポートで引用しないためにも本書で疑う技術を身に付けることをお勧めする。



目 次

● 巻頭言「古書の寄贈」	高野 保夫(1)
● 「君はマイクロフィルム・リーダーを見たか？」—海外の図書館事情—	村上 雄一(2)
● 思い出の一冊：『チョウはなぜ飛ぶか』	小山 純正(3)
● 特別展示：「福大考古学の20年—行政政策学類考古学研究室所蔵資料の展示—」の開催	菊地 芳朗(4)
● 一般利用者の立場から	菅野 幸晴(5)
● カウンターの内側から	星 久美子(5)
● 学内教員著作寄贈図書の紹介	
『持続型社会は近づいたか』	石田 葉月(6)
『「平成大合併」の政治学』	今井 照 (6)
『自己形成の心理学』	中間 玲子(6)
『人物叢書・足利義持』	伊藤 喜良(7)
『天皇・天皇制をよむ』	伊藤 喜良(7)
● こんなものがあったのか！	吉田 秀夫(8)